



土木施設×Retain

## 余部鉄橋展望台「空の駅」

Amarube Viaduct Observatory "Sky Station"

兵庫県美方郡香美町



株式会社ニュージェック/地図グループ  
高見 元久(会誌編集専門委員)  
TAKAMI Motohisa

特集 土木施設×Re  
Special Features / Civil Engineering Facilities and Re

### 人気の余部鉄橋

余部鉄橋は、日本海に面する兵庫県美方郡香美町の谷間に架かる橋で、山陰本線の<sup>よろい</sup>鑑駅と<sup>あまらべ</sup>余部駅の間に位置する高さ41.5m、長さ310.7mのトレススル橋であった。これは、鋼材をやぐら状に組み上げた橋脚を多数使用して橋桁を支持する形式の橋である。1909(明治42)年に着工し、約33万円(現在の価格にして約42億円)の建設費、延べ25万人の労力をかけ、1912(明治45)年に完成した。完成当時、東洋随一の鋼トレススル橋であった。全国から多くの人々が訪れる観光名所として親しまれ、ワインレッドに塗装された橋脚の上を走る列車の姿が勇壮で、鉄道ファンには絶大な人気があった。

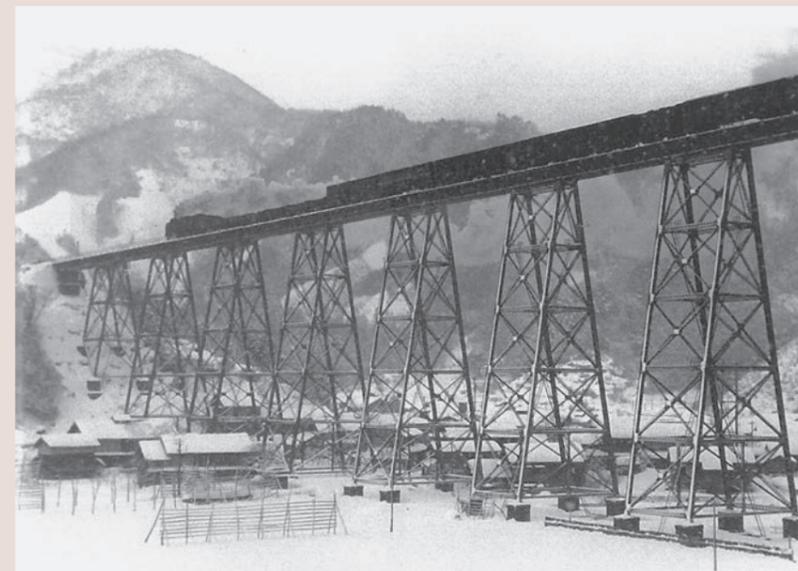
そんな中、日本海から強風が吹きこむ1986(昭和61)年12月28日、橋通過時に突風を受けて機関車がけん引する回送客車が地表へ転落し、住民に多

数の死傷者が出た。これを契機に、余部橋梁のあり方について検討した結果、コンクリート橋への架け替えが決まったが、橋の一部を展望施設として残すことになった。なぜ余部鉄橋を展望施設として残すことになったのだろうか。

### 余部鉄橋の今昔

余部鉄橋を含む山陰本線は、複数の計画案の中で相対的に人口の多い土地を通過するルートであり、路線延長は他よりも長いものの勾配が緩く、当時の主力機関車に適していたことが路線選定の決め手になった。そして、海風の強い余部の谷間を橋梁で通過することとなった。

強風時に通過するには徐行を余儀なくされ、線路自体が高所にあり、橋梁形式が特殊であることから、風対策はなかなか進まなかった。こうした中、列車



昔の余部鉄橋の雄姿



余部鉄橋を渡る住民たち

転落事故が発生した。そして列車走行の安全のために風速規制が強化され、たびたび運行が停止し、定時走行に大きな影響が生じていた。

風対策の検討に加え、架け替えに向けた取り組みがなされ、景観面も含めた検討の結果、新たにプレストレスト・コンクリート(PC)橋を架けることが決まり、2010(平成22)年8月に現在の新しい余部橋梁が完成している。旧橋が鉄骨の橋脚であったのに対し、新橋はコンクリートの橋脚が採用されているため、橋脚高は変化がないものの、橋の姿はかなり変わることとなった。

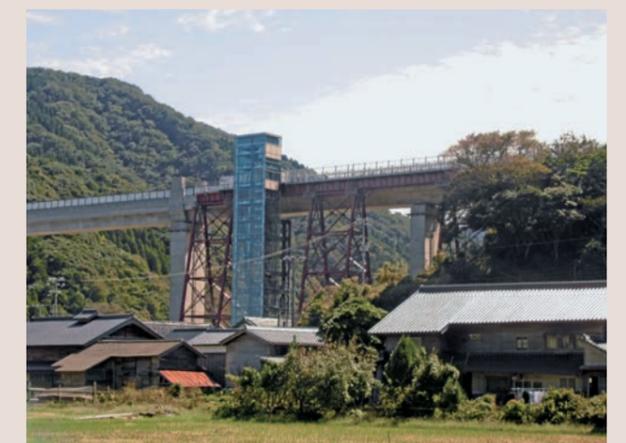
### 余部の住民にとっての鉄橋

余部鉄橋の架設には多くの作業員が必要とされ、余部の住民だけでなく、周辺の多くの人がこの架設に動員された。その一方で、山陰本線開業当時は余部に駅がなく、余部の住民は徒歩で急坂を上って線路に到達し、高さ約41mの鉄橋を渡り、線路伝いに幾つかのトンネルを抜けて1.8km先にある最寄りの鑑駅を利用していたのである。鉄道を利用するにはまだまだ不便で、走行中の騒音や落下物等もあって、頭上を通過する迷惑な存在であった。

しかし、余部鉄橋は見上げるだけの存在であったが、強風雪にも耐えるワインレッド色の橋がいつしか自分たちの暮らしの一部に同化し、橋への思いが強くなったのではないだろうか。

潮風の影響が強い場所に設置された余部鉄橋は、鉄製であったことから防錆対策が常に必要とされ、架設3年後には防錆塗装が実施された。その後、塗装会社員2名を「橋守」として採用し、常駐して維持管理にあたらせた。橋守は第二次世界大戦を経た高度成長期まで技術を伝承しながら継続された。

一方、余部駅の設置は余部鉄橋架設からほぼ50年経過した1959(昭和34)年になってからであり、多くの住民の陳情によりようやく設置された。余部の住民たちはこれで余部鉄橋の上を歩いて渡ることもなくなった。停車する列車の本数が少なかったとは言え、余部駅ができたことで地元の足として利便性が増したことは確かである。余部の中学生たちに



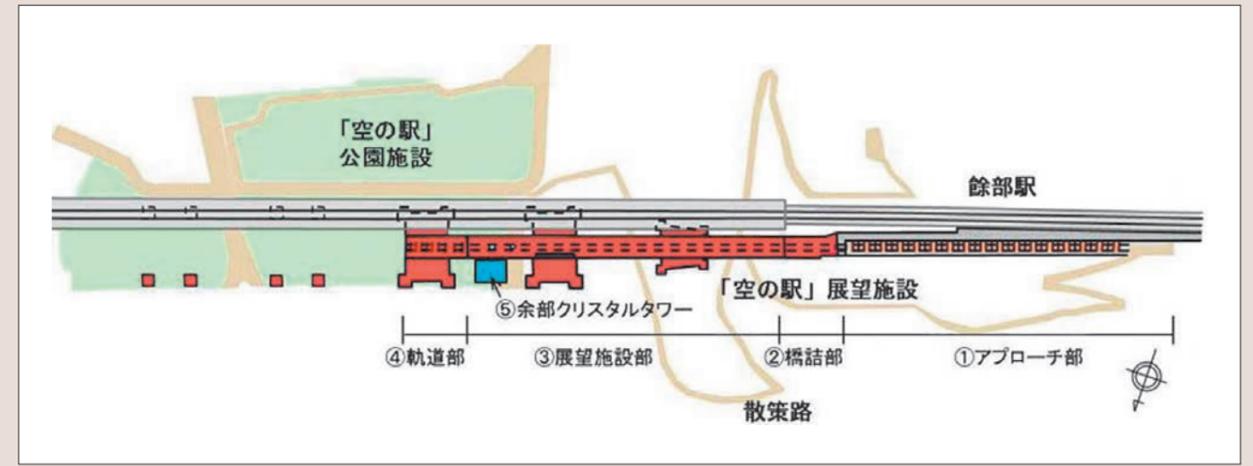
保存された余部鉄橋とクリスタルタワー



異なる形状で保存された余部鉄橋の橋脚



旧軌道が残る展望台



余部鉄橋「空の駅」施設図

よる駅の掃除や有志による植栽等の献身的な関わりが続いている。

ちなみに「余部駅」と漢字表記が異なるのは、1930(昭和5)年に開業した姫新線の余部駅との重複を避けたためである。

### 余部鉄橋から新余部橋梁へ

架け替えが決まり、旧鉄橋は撤去か保存かに話は移る。余部の住民にとっては、そのままの姿で全体が残ってほしいと思う一方、列車転落事故の記憶が未だに強く残っており、橋の姿を見るのも忍びないという感情もあった。鎧駅側はトンネルから橋までの距離が短く、橋脚を避けて通るのが困難であったため、橋脚を撤去する必要があった。

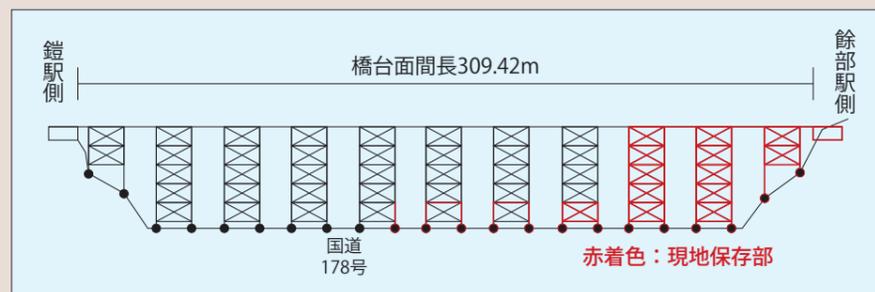
100年前に架設され、100年間の使用に耐えた鉄橋への思いは強い。鉄橋は100年の間に地域の暮らしに溶け込んでおり、ないと困るわけではないのだが、風雪の中でも谷間に聳え立つ鉄橋はいつの間にか地域のシンボルになり、地域住民のふるさとの記憶になっていた。できることなら鉄橋を残し、地域の活性化にもつなげたいとの期待も大きかった。

列車転落事故の記憶が強く残る余部と、やや離れた地域の住民とに余部鉄橋を残すことに温度差はあったが、観光資源として利活用への期待から検討

会に上申した。約100年の間、山陰本線の運行を支えてきた余部鉄橋の歴史を後世に継承するとともに、人々の交流を促す観光拠点とするため、種々の保存案が検討された。余部の住民の意向にも配慮した形で最終的に余部駅側の3橋脚が往時を知る遺構として現場にそのまま保存されることになった。この3橋脚3スパンの橋梁部分を残し、旧鉄橋直下に自由広場等からなる公園施設と併せた展望施設として残すことを決め、「余部鉄橋『空の駅』」展望施設が2013(平成25)年5月に完成した。安全柵で仕切られた先に数m分のレールが往時のまま残され、その先にずっと続くようなあしらいである。

### 展望台として残った余部鉄橋

展望施設として、そのまま残された橋脚のほかにも、旧橋の一部が残されている。橋下を通る国道178号の東(鎧駅)側には基礎コンクリート部と橋桁の一部が潮風の中、橋脚基礎の上に保存されている。西(余部駅)側には手前から奥に向かって、「①



余部鉄橋の橋脚配置と保存された橋脚



「空の駅」の駅長「そら」ちゃん

現在、展望台へは、保存橋脚付近から軌道面までエレベーターで行き来できる「クリスタルタワー」が設置され、観光スポットとして多くの観光客が訪れている。全面ガラス張りのエレベーターは、昇降時に保存された鋼製橋脚が手に取るように見え、鋼材の凹凸やリベット一つ一つまで見ることができる。離れて全体像を見ることは叶わなくなったが、ほどよく近くで触れ合えることでより一層記憶に留められる存在であり、地域に貢献しているのではないだろうか。

なお、「空の駅」には直下の公園をのんびり散歩する駅長がいる。あまれば振興会の方々世話をするリクガメの「そら」ちゃんだ。保存された鉄橋を末永く見守っていくのには適任であろう。

基礎に斜めに立つ鋼製の主材1本]「②斜め3本の鋼材]「③四隅から鋼材が組みたてられた状態]「④鋼材に筋交いが設置された橋脚1段目」、その先には原位置で保存された元の橋脚が見通せる。まるで橋脚が建造されていくかのような演出である。

潮風に曝される橋脚は定期的に塗装が必要であり、維持管理を考えると多くの橋脚を残すのは困難と判断され、完全な形で残すことができなかつたとはいえ、ここに東洋一の鋼トレスル橋があったのだという意地が感じられる。なお、保存された橋脚は年1回の目視点検、5年に1回の定期検査が実施されている。

鉄橋を保存する過程でも、まとまるまでに困難を極め、今後の維持管理に多額の資金を要するようで、保存し続ける大変さについては、住民も気にかけている。

- <取材協力>  
1) 余部地区・あまれば振興会  
2) 香美町役場観光商工課

- <参考資料>  
1) 「余部鉄橋～雄姿を心に刻んで～」香美町ホームページ 香美町観光商工課 2021年  
2) 「余部鉄橋「空の駅」～余部鉄橋の再出発!～」兵庫県ホームページ 兵庫県土木部交通政策課  
3) 「余部鉄橋物語」田村喜子 2010年 新潮社  
4) 「余部鉄橋架替記念事業 記念誌」香美町 2007年  
5) 「余部鉄橋「空の駅」リフレット 兵庫県  
6) 「土木コレクションHANDS+EYES 2014」土木学会  
7) 「ニュース 余部鉄橋「空の駅」受け継いだ歴史とスゴイ眺望」日経コンストラクション 2013年7月8日 大井智子  
8) 「土木遺産の香 東洋一のトレスル・プレートガーダー鉄道橋「余部鉄橋」」阪口直人 Civil Engineering Consultant 228 2005年7月号

- <図・写真提供>  
P28上、P31中写真:高見元久  
P29下写真:本田悠稀実  
P29上左、P29上右写真:香美町役場  
P30上左写真:塚本敏行  
P30上右写真:高橋真弓  
P30下図:参考資料5より  
P31上図:参考資料2より